Caroline und Johann Gottfried Herder

– Eine Lieve in der Geschichte der Deutschen Literatur des 18. Jhs –

Shoji Hamajima

Résumé

Maria Caroline Herder, geborene Flachsland, die Lebensgefährtin von Johann Gottfried Herder, hat durch ihr ganzes eheliches Leben, ja sogar auch nach dem Tod des Mannes, ihn hoch verehrt, geliebt und, in jeder auch so widrigsten Situation, rückhaltlos zu ihm gehalten. Mit ihr hat Herder eine außerordentlich gute Ehe geführt.

Caroline war 20 Jahre alt, als sie Herder kennenlernte. Sie lebte damals, nach dem Tod der Eltern, bei ihrer Schwester in Darmstadt, die mit einem Geheimrat offenbar unglücklich verheiratet war.

August 1770 begleitete Herder einen fürstbischöflichen Erbprinzen als Erzieher und Reiseprediger nach Darmstadt, wo er J. H. Merck, Kriegszahlmeister am dortigen Hof, Literaturkritiker und Herausgeber, und über ihn die damals 20jährige Caroline Flachsland kennenlernte.

Caroline, die im Haus des Geheimrats in bedrückender Abhängigkeit lebte und ständig unter den Launen des Hausherrn leiden musste, konnte nur in dem von Merck unterhaltenen Kreis der Literaturfreunde Trost finden, der sich schwärmerisch mit der Literatur der Empfindsamkeit beschäftigte. In diesen Kreis trat nun Herder, der damals schon berühmte Literaturkritiker und Prediger. Und in ihm fand sie sofort einen gefühlvollen, liebenswürdigen Freund, den sie fortan anhimmelte und nie damit aufhörte.

Herders Leben war voll von Kämpfen, Anfeindungen, Verbitterungen und Enttäuschungen. Er wurde von Kant vernichtend kritisiert, von Schiller gehaßt, von Jüngeren geringgeschätzt und von Goethe, seinem Schüler, gemieden. In all diesen widrigen Situationen kämpfte seine Frau mit, und zwar nicht nur, indem sie zu Hause ihrem Gemahl den Rücken freigehalten hat, sondern auch, weil sie als erste alle seine Schriften las, mitdachte und verstand. Nach dem Tod Herders gab sie sogar, mit den Söhnen zusammen, seinen Nachlaß heraus.

18 世紀ドイツ文学に見るある愛の形

浜　島　昭　二

ドイツ文学史におけるヘルダー

18 世紀後半の東プロイセン、Königsberg[1]（ケーニヒスベルク、現ロシア領カリーニングラード）の街に 3 人の才能ある思想家・哲学者が学び、活躍していた。Immanuel Kant（イマヌエル・カント、1724 ～ 1804）、Magus von Norden（「北方の魔術師」）と呼ばれた Johann Georg Hamann（ヨーハン・ゲオルク・ハーマン、1730 ～ 88）そして Johann Gottfried Herder（ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー、1744 ～ 1803）である。Kant も Hamann も Königsberg の生まれで、「Königsberg の哲人」Kant は一生をここで送った。

Herder は、まず何より Johann Wolfgang Goethe（ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ、1749 ～ 1832）の »Die Leiden des jungen Werthers«（『若きウェルテルの悩み』、1774）と Friedrich Schiller（フリードリヒ・シラー、1759 ～ 1805）の »Die Räuber«（『群盗』、1781）に代表される 18 世紀後半の »Sturm und Drang«（『シュトルム・ウント・ドランク』）文学運動の理論的リーダーとして紹介される。

彼はまた、»Über den Ursprung der Sprache«（『言語起源論』、1772）によって近代言語学研究の出発点に位置づけられる。彼は言語の起源を創造の神による贈り物でも動物的本能から生まれたものでもなく、人間に備わった考える能力の産物であると主張した。

Herder はさらに、歴史哲学者としても重要な二つの論文を発表しているが、1784 年に発表された主著 »Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit«（『人類史の哲学のための諸理念』、1784 ～ 91）は、かつての師であり、3 年前の 1781 年に »Kritik der reinen Vernunft«（『純粋理性批判』）を発表していた Kant から、感情が先走った非論理的なもので、概念規定がきち

[1] 地名、人名には表情があり、イメージを喚起する力がある。カタカナ表記はこれらを再現できないのみならず、発音上も無理がある。また、作品名の邦訳には Goethe（ゲーテ）の »Dichtung und Wahrheit«『詩と真実』のように明らかな誤訳が定着しているものもある。これ以後、ドイツ語の地名、人名および作品名は初出時にカタカナ読みあるいは邦訳名をカッコ内に記し、以後はドイツ語表記のみとする。

んとしておらず､学問的な論文というより物語であるなどと徹底的に批判された。以後 200 年間、近代ドイツ観念論哲学の主流となっていった Kant 派に対し、Herder の哲学的業績は正当に評価されず、再評価は始まったばかりである。ただ、Goethe は後年、Johann Peter Eckermann（ヨーハン・ペーター・エッカーマン、1792 ～ 1854）との対話 »Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens（『エッカーマンとの対話』、1836）でこの »Ideen« を Herder の最も優れた著作として高く評価している。

Herder はまた、何世紀にもわたって抑圧されてきたスラブ民族の豊かな文化にほとんど初めて目を向けた人物で、新しい文学は地に足を付け自然と共に暮らす民衆の日常とその民族の文化的伝統を基礎にするべきであると考え、民衆の間に歌い継がれてきた民衆歌謡に注目してみずからそれを収集・出版した。彼が学んだ Königsberg や最初に教師及び牧師として赴任した現在のラトビアの Riga など、東プロイセンは本来、スラブ民族が住んでいた地域で、14 世紀以降、ドイツ騎士修道会による植民活動でドイツ人が住むようになった所であり、彼の周りには多くのスラブ人がいた。いわば支配層に属する Herder ではあったが、彼は市井の人々や農民そしてスラブ人とも分け隔て無く接し、彼らの民族文化を正当に評価することができたのである。

そうした経験もあって Herder は、ドイツ文学の改革のためには自分たちの伝統文化を再発見し、民衆歌謡や神話・伝承を発掘していかなければならないと訴えた。詩聖と呼ばれたホメロスも、Herder にとっては絶対的規範ではなく、歴史と自然環境という条件の中で理解されるべきであった。これは Winckelmann（ヴィンケルマン、1717 ～ 1768）が »*Gedanken über die Nachahmung der Griechischen Werke in der Malerei und Bildhauerkunst*«（『ギリシア絵画・彫刻模倣論』、1755）において古代ギリシアの造形芸術を題材に先駆的に示したことであったが、古典・古代の完成された芸術との関係について Winckelmann の理論に内包されるアポリアを Goethe や Schiller が「ドイツ古典主義」確立に向けて形式の完成に焦点を当てて理解したのに対し、Herder は結果の模倣ではなく、その創造の仕組みに学び、民族とひいてはその民族の歴史と伝統の中にいる個人の自己表出としての文学・芸術を目指した。

彼が Straßburg（シュトラースブルク／シュトラスブール）で Goethe を初めとする若き文学青年達に »Gesänge des Ossian«（『オシアンの歌』、1760）[2] を勧め、Goethe の »Götz von Berlichingen«（『鉄の手を持ったゲッツ・フォン・ベルッヒンゲン』、1774）を高く評価したのはこのためであるが、Herder が終生これに拘り続けたのに対し、Goethe と Schiller が古典主義の完成を目指す方向に進んだことが、後年の Weimar における対立の理由である。

Herder の職業はプロテスタントの牧師で、彼の該博な知識に支えられた情熱的な説教は多くの人々を魅了した。その中の一人が､後に彼の妻になる Caroline Flachsland（カロリーネ･フラックスラント、1750 ～ 1809）である。そして市井の人々と交わることは彼にはキリスト教的な愛

[2] »Ossian« が偽作であったという問題にはここでは立ち入らない。Goethe は »Werther« で Ossian を引用している。

の実践として大切なことであった。彼は後半生を Weimar（ワイマール）公国の教区統括責任者として送るが、彼の説教には近郷近在から多くの市民や農民が、今日、親しみを込めて Herder 教会と呼ばれる Stadtkirche St. Peter und Paul に押し寄せた。

彼には詩もドラマ作品もあるが、創作面での才能は Goethe や Schiller などとは比較にならず、文学の世界では、彼はあくまでも理論家・評論家であった。

このように Herder は詩人、作家、哲学者、文芸評論家、聖職者、民俗学者など、さまざまな分野で活躍したが、彼を突き動かしていたのは、普通の人々が、歴史的発展の結果として遠い未来に来るであろう人々の幸せに向けた捨て石になるのではなく、今、ここでかけがえのない存在として尊厳を以て大切に扱われるべきであるという基本思想であった。これは本来、神の似姿として定義された人間の尊厳に対する敬意を基礎とし、神の被造物として全てのひとに平等に与えられている「理性」によってみずから自立的に考えることができる人々が対等・平等な立場で作るべき社会に向けた 17 世後半から 18 世紀にかけてのヨーロッパ啓蒙運動が、新たな特定の規範を絶対化してしまうというアポリアに直面し、いわば一部エリートによる先導を是とするか、それでもなお社会の下層にいる人々をも巻き込んでいくことに執着するかという分岐点において発生した対立と関係している。

貧しい家庭環境から刻苦勉励して封建制身分社会の中でみずからの地位を闘い取っていかなければならなかったが故に後者の立場を採る Herder が、Kant や Goethe/Schiller と対立するようになったのは避けがたいことであったが、Kant が師であり、Goethe がかつての弟子で、Herder が Weimar 公国の教区総監督のポストに就くことができたのは、その努力に依るところが大きかったこと、そして、Goethe の家から徒歩 2 分の所に Schiller の家があり、そこから Herder の教区総監督公舎まで 5 分程という日常生活上の距離感等もあって、理論上の対立は個人的感情を伴い、Herder は傷つき、孤立していく。その厳しく激しい闘いの中で、彼の一番の理解者であり、同志であり、終生変わることなく彼を愛し尊敬し続けたのが妻 Caroline であった。二人の出会いから結婚に至る物語は、その健気さ、純粋さにおいてドイツ文学史の中でも希有なものである。そして、この個人の恋愛物語が文学史的に意味があるのは、文学運動の社会運動としての側面がここにはっきりと現れているからであり、啓蒙運動の必然的結果としての女性の自立が、夫と共に戦った妻 Caroline に見て取れるからである。

略歴

Herder は 1744 年、東プロイセンの Mohrungen（モールンゲン、現ポーランドのモロンク Morąg）に 5 人兄弟の長男として生まれ、質素な家庭環境で育った。地元の小学校で基礎的な教育を受けるが、幼少時に知的環境に恵まれていなかったことは、彼にとっては生涯のコンプレックスとして残った。結婚する前の Caroline Flachsland に宛てた 1770 年 9 月 22 日の手紙にヘルダーは、母親からは愛されたが、学問の道に進むことを許されなかったと、怒りを込めて書いている。1762 年、Königsberg に移り住む。これは大学進学のためではなく、彼の才能を惜しんだ

Mohrungen の教区助祭の努力によって奨学金を得、外科の勉強と共に Herder が持病として一生抱え続けた眼の病気を治療させるためであった。こうして Herder は 18 歳で故郷の Mohrungen を後にしたが、二度とそこに戻ることはなく、両親にも再び会うことはなかった。しかし、外科の勉強を始めてはみたのだが、初めての解剖で気を失ってしまい、医学の勉強を諦め、神学部に入学した。

このときこの大学で哲学を教えていたのが、38 歳の Kant であった。Herder はたちまちこの新進気鋭の哲学教授の虜になり、講義は全て受講した。Kant もこの熱心な学生が気に入り、受講料を払わずに講義を聴くことを許した。

1764 年、Herder は Hamann に見送られて母国プロイセンから、当時は Livland（リフラント、現在はバルト 3 国の一つラトビア）の首都である Riga（リガ）に大聖堂付属学校の教師として赴任した。その前年の 1763 年、父親が亡くなっている。リガの現在の人口は約 70 万人で、中世においてはハンザ同盟都市として大いに栄えた。当時もごく最近までもこの地域はロシアの支配下にあったが、相当程度自治が許されていた。ここにはさまざまな民族が混じり合って暮らしており、支配層のロシア人、ドイツ人、ラトビア語を話す現地人の多数派、少数のポーランド人などがいた。

ここでの経験は後に『歌に見る諸民族の声』という民衆歌謡収集に反映し、当時、強国の支配下に置かれていたスラブ系諸民族の文化を評価する作品に繋がっていく。これによって、当時はルイ王朝のフランス宮廷文化の基準から見てレベルが低いとして見下されていたスラブの文化に正当な評価を与えたとして、東ヨーロッパでは今日でも Herder は高く評価されてる。因みにロシア人もスラブ民族であるが、宮廷の人々は熱心にフランス文化を模倣し、フランス語で会話をしていた。

ドイツは当時、多くの小国に分かれていて、プロイセンはその中でももっとも大きな王国であったが、その宮廷でも事情は同じであった。当時の国王フリードリヒ 2 世（大王）は、ドイツ語は文化度が低いと馬鹿にしていた。

こうした社会状況の中、Herder が民族の独自性、オリジナリティをそれ自体価値のあるものとして評価したことは、特定の文化的現象を理想とし、それ以外の文化を未発達と見なす意見に対する批判であり、このことは、一つの社会における特定の世界観を絶対視する考え方を否定することでもあり、個性を尊重する立場に繋がっていく。

Herder は、教師、説教師としての活動に加えて作家、批評家として新しい時代の文学はいかにあるべきかという課題に取り組むようになり、»Fragmente über die neuere deutsche Literatur«（『新しいドイツ文学についての断章』、1766, 67）を発表した。これは Gotthold Ephraim Lessing（レッシング、1729 ～ 1781）が Friedrich Nicolai（ニコライ、1733 ～ 1811）などとベルリンで発行していた »Briefe, die neueste Literatur betreffend«（『最新の文学に関する書簡』、通称『文学書簡』、1759 ～ 65）の補遺あるいはコメントとして企画されたもので、固定化された文学評価の基準、モデルに対して批判的な論を展開している。

この時代に盛んに議論されていたのは、いわば評価の確立した文学と新しく生み出されるべき

文学の関係をどこに求めるかという問題で、たとえば古代ギリシアのホメロスによる叙事詩やソフォクレスなどの悲劇を理想とするのであれば、その形式に新しい時代の内容を盛り込めば、人々の心を動かす文学が生まれるのかという問題である。

当時は、フランスのルイ王朝をモデルとするいわゆる絶対王政が時代の転換期にあたって崩壊する兆しを見せ、それに対して市民たちの経済力が増大し、身分差別のない、自由な社会を作ろうという気運が盛り上がってきていた。これが 1789 年のフランス革命に繋がっていくのであるが、来るべき市民社会の主役になろうとする市民たちが、文化の面でも王侯貴族より優れていることを示そうというさまざまな活動が展開されていた。高貴な人々が主役のギリシア悲劇ではなく、市民あるいは人間的心情が中心となる Bürgerliches Trauerspiel（「市民悲劇」）を作り出そうという努力もその一環である。

一方で、新しい文学は文学として高い完成度を備えていなければ、伝統的文学に取って代わることはできないという観点も重要であり、時代や地域を越えた普遍性が求められた。Lessing たちの努力はここにあったが、しかし、普遍的な価値を確定することは他方で、その価値尺度の絶対視を結果としてもたらす。それは個人の個性であれ、地域あるいは民族の特異性であれ、個別のバリエーションを許さないという硬直性に繋がっていく危険をはらんでいる。Riga というさまざま民族がそれぞれの言語と文化的伝統、歴史的発展段階を背負って共存している場で、単一の物差しで評価することの問題を知った Herder は、この視点から彼の論を展開する。

この『断章』を匿名で発表した後、Herder は次々に評論を発表する。1769 年の »Kritische Wälder«（『批評の森』）では、尊敬してやまないその Lessing の芸術観が合理主義的で、芸術作品に芸術の外から評価の尺度を当てはめようとするものであるとして批判した。

旅と出会い

1767 年に Herder は、師の Kant に、もっと世界を見るために Riga を出たいという希望を伝えているが、1769 年 5 月、市参事会に惜しまれながら聖堂付属学校の教師及び二つの教会の説教師の職を辞する。彼の旅費は友人たちの支援によって工面されたもので、とくに出版社を経営していた Hartknoch（ハートクノッホ）が最大の支援者であった。Herder はコペンハーゲンからフランスのナントに向かい、そこでフランス文学や政治評論、ジャーナリズム、演劇など最新の文化事情に触れる。そこからさらにパリに移動し、Diderot、d'Alembert といった百科全書派など、フランス啓蒙主義運動の中心人物たちと知り合う。

いつまでも友人たちの支援で旅を続けることに気が引けていた彼は、リューベック領主司教の皇太子の修養旅行に教育者、説教師として付き添う仕事に就いた。その途次、1770 年 8 月 12 日、Darmstadt（ダルムシュタット）に立ち寄った。皇太子の母親は Landgraf Hessen-Darmstadt（ヘッセン・ダルムシュタット方伯）Ernst Ludwig（エルンスト・ルートヴィヒ）の孫つまり親戚筋であったため、これを訪問し、しばらく滞在することになっていたのである。

Herder は皇太子に付き添って宮廷を訪問し、そこで王女たちの教育係を通じて戦費調達担当

の責任者をしていたJohann Heinrich Merck（メルク、1741-91）と知り合う。Merckは文芸評論家、文芸誌編集者、エッセイストであり、当時の潮流であった「感傷主義文学」のサークルを主催していた。[3]

このMerckを通じて枢密顧問官Hesse（ヘッセ）と知り合い、その家に出入りするようになるが、その妻がフリーデリケ、旧姓フラックスラントでその妹、つまりHesseの義理の妹がCarolineである。

1770年8月19日、HerderはDarmstadtの宮廷教会で説教を行う。有名なHerderが説教をするということで大勢集まった聴衆は博識で情熱的なHerderの説教に大きな感銘を受けた。その中にCarolineもいた。当時20歳のCarolineはHerderに魅了されてしまい、集会の後、Herderを訪ね、二人は意気投合し、一緒に散歩をしながら文学の話に夢中になった。彼女はこのときのHerderがおこなった説教について、かつて聞いたことのない天使の声であったと記している。

彼はまた、Merckの文学サークルにも出入りするようになり、共にFriedrich Gottlieb Klopstock（クロップシュトック、1724-1803）の詩について語り合った。»Messias«（『メシア』、1748～）の作者Klopstockはヘクサーメターと自由韻律によってドイツ詩の新しい方向を示し、敬虔主義的宗教感情と一体化した内面感情を歌い上げた彼の詩はGoetheやHerderなど若い文学者から熱烈に支持されていた。

Herderは説教の翌日、Carolineに手紙を書いているが、この後、二人が結婚するまで多くの手紙が二人の間で交わされることになる。Carolineは、1週間後の8月25日、この日はHerderの誕生日であったが、Herderに手紙を書き、「人の心の無垢、甘く純粋で最も気高い優しさ、情感豊かな美しい自然というものを思い描こうとすると、それはあなたの姿以外にはありません」、と書いている。

Caroline

Carolineは役人であった父を早くに亡くし、後に大臣になる枢密顧問官Hesseと結婚していたすぐ上の姉のところで世話になっていた。姉夫婦の関係は冷ややかで、もはや人間的な心の通い合いはなかったが、父親を亡くしていたので離婚するわけにもいかず、姉妹はお互いを心の支えとしていた。

父親が亡くなったときCarolineは5歳で、以後、残された家族は、Hessen-Darmstadt公国の領主の側室になっていた一番上の姉が領主から受け取る手当で生活してきた。母親が亡くなった後、二番目の姉が16歳のCarolineを引き取ったのである。この時代、親も財産も家柄もない女性が、自分の意思と努力で自分の道を切り開いていくことはほとんどあり得ないことで、何らか人の世話にならざるを得ず、豊かな感性を持った女性にはつらいことであった。そうした状況の中でCarolineの前に現れたのがHerderで、彼女は、ある友人に宛てた手紙の中で、有名な

[3] ドイツ言語・文学アカデミーは1964年以来、優れた文芸評論・エッセイに対してこのMerckの名を冠した賞を出している。

Herder と知り合いになったと、感動と自慢を込めて伝えている。

文学少女であった Caroline は、姉の嫁ぎ先に居候させてもらっているという引け目と、それをあらゆる機会に感じさせようとする義兄との関係ゆえの息苦しさから逃れることもあって、Merck が主催する文学サークルに入っていた。Caroline は Herder と Klopsock など二人が好きな詩人の話をしたり、友人たちとほとんど毎日午後になると Herder を囲んで過ごすというほどに夢中になる。しかし、Herder が付き添っている皇太子の旅の予定が迫り、別れの時が来る。

8 月 27 日に Darmstadt で手紙を書いた Herder は皇太子に同行して Mannheim（マンハイム）そして Heidelberg（ハイデルベルク）に向かうが、Mannheim に着くとその夜に手紙を書き始め、翌日には Heidelberg で続きを書いている。その中で Herder は別れのつらさ、二人で過ごした時間の思い出などに触れながら、何度も「元気で」と書いている。そこには自分の将来に対する不安もあり、まだ確かな仕事に就いていないため Caroline に最後の一言を告げることができない心の苦しさが見て取れる。彼は Caroline に、自分との関係が彼女の幸せを邪魔することだけはないようにして欲しい、友人としての私の思い出が彼女を元気にし、心と精神を成長させる糧になれば嬉しい、と苦しい胸の内を書き記している。

Herder は Karlsruhe（カールスルーエ）で皇太子と別れ、目の持病治療のため Straßburg（シュトラースブルク、現フランス・シュトラスブール）へ向かう。そこから Caroline に宛てた手紙の中で Herder は、当地の宮廷貴族との交流がいかに退屈で不愉快なものであるか書いている。これは一方では、Caroline との心と心が通い合う語らいがいかに彼にとって大切かを強調し、恋心を伝えようとするものであるが、同時に、表面的な知識、教養としての文学ではなく、感情、人間の心情の中から出てくる感動の真実性を引き出す文学を求めているのだという文学論的主張でもある。

9 月 9 日、10 日に Straßburg で書かれた手紙に、待ち焦がれていた Caroline からの手紙がようやく届いたことを書いている。手紙が来なかった 2 週間は自分には何世紀にも思えると大げさな言い方になっているが、この間も Herder が時には数日にわたって手紙を書き続けていたことを考えると、口先だけのことではないと理解できる。ここで Herder は、彼に対する不信と疑念を吹き込むような周りの人々の影響で、彼女の心が自分から離れてしまったのではないかという不安を吐露している。ここからしばらく、二人の関係が難しい局面に入り込んでいく。

9 月末、Caroline は Herder に、もう手紙は書かないで欲しいと伝え、10 月 1 日に彼はショックを受けた様子で返事を書いている。問題は、Herder が Caroline の純粋な心と素直な感受性を繰り返しほめながら、話題が常に Klopstock の詩や Lessing のドラマの解釈であり、彼が彼女に「あれは読んだか、これは読んだか？」と聞いてばかりいることであった。Caroline はこのとき、彼の求婚を待っていたのである。

Herder が引用している Caroline の手紙は次のようになっている。「あなたは私に元気でいてください、私の不安定な運命にあまり振り回されないようにと言ってくださる。ご親切本当にありがとうございます」。そしてこれに対して Caroline は、後悔しないために今後、手紙は書かないで欲しいと頼み、Herder は、彼女に手紙を書くことだけがこのつらい世の中で唯一の喜びであ

ると情熱的な言葉を書き連ねている。もし自分の言葉があなたを傷つけたのなら許して欲しいとも書いているが、彼の文章から読み取れるのは、二人は二度と会うことはないのだから、手紙のやりとりがなんになるかという Caroline の問いかけである。

それはそれとして注目したいのは、Herder を愛し、憧れ、神のように尊敬してやまない Caroline が、しかも新進気鋭の評論家、有名な宗教家である Herder に対し自分の人生を懸けて臆することなくはっきりと自分の考えを伝え、その Herder が、うろたえながら、必死に彼女の心を引き留めようと真摯に答える、その誠実さである。不安定な身分、将来への不安も包み隠さず書いている。彼にとって Caroline は、当時文学青年の間ではやっていた、若い女性に恋愛詩を作って捧げるという文学趣味的恋愛ゲームの相手ではなかった。後に Caroline と知り合った Goethe はそういう詩を彼女に捧げているが、これを彼女から伝え聞いた Herder はこの詩を批判し、Goethe を「軽い男」と呼んでいる。

子どもであろうと女性であろうと一人ひとりの個性と人格を尊重するという Herder の基本姿勢は、単なる理論ではなく、自分の日常の生活においても実践されるべき哲学であり、文学論なのである。生まれながらの教師である Herder は教えたがりで、それが人から疎まれる原因にもなっていくのであるが、Caroline への手紙でも見られるこの態度は、不器用な Herder の照れ隠しであったとも受け取ることができる。。

Caroline の後ろには義兄の枢密顧問官 Hesse がいた。この義兄は彼女に、Herder は不安定な友人であり、夫として安心できないと忠告していた。Herder はこれを聞いて大きなショックを受ける。この不安定さを義兄が経済的な意味で言ったのか、性格を問題にしたのかは定かではないが、Herder はすでに 9 月 22 日の手紙の中で、自分の貧しい、恵まれない生い立ちを Caroline に明かしている。自分がいかに努力し、苦労してここまできたのかを彼女に伝えようとするものであるが、こうしたことをここまで赤裸々に語ることは、今後、知識階級の人間として避けがたく貴族たちとも関わっていこうとしている者にとっては考えられないことで、この間に二人の関係はそこまで深まっていたと考えることができる。もし自分の生い立ちについて告白した手紙が人の目に触れるようなことがあれば、それは評論家、理論家として立っていこうと考えている Herder にとって致命傷になりかねない。それで彼は、この 10 月 1 日の手紙の中で、もし二人の関係がこれで終わるのであれば、その手紙を返して欲しいと頼んでいる。

Herder の人生はこのとき、次のステップに進もうとしていた。Straßburg に旅立つ前、人を介して Graf Wlhelm von Schaumburg-Lippe（シャウムブルク・リッペ伯爵ヴィルヘルム）から彼に、Bückeburg（ビュッケブルク）の教会会議員・上級牧師のポストが提供されていた。これに対し Herder は、現在の仕事を辞することができたらという条件を付けて前向きに答えていたが、最終的に辞職も認められ、1771 年 4 月初め、Straßburg 滞在を終えて、Darmstadt に向かう。そこで Caroline 他友人たちとの再会を果たし、約 2 週間滞在した後、4 月 19 日、Bückeburg に向け

て出発するが、途中 Frankfurt am Main（フランクフルト）で、Straßburg で知り合った Goethe の家に立ち寄り、Goethe の両親、妹に会っている。この Goethe と Herder の出会いというドイツ文学史上の大事件について Goethe は、自伝 »Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit«（1808 ～ 31）[4] に次にように書いている。

Goethe との出会い

「私にとって最も重要な結果をもたらすことになった出来事は、Herder との出会いとその後の親密な関係である。彼は Holstein-Eutin 公国の皇太子に付き添っての旅の途上で Straßburg に来たのである。我々のグループは、Herder がこの町に来ていることを知って、何とか近づきになりたいと希望していた。そんなとき私は、全く予想外に、たまたま彼と知り合いになるという幸運に恵まれた。つまり、私は、誰だか忘れてしまったが、ある有名人を訪ねて旅館 Zum Geist に行ったのであるが、そこで階段を上がろうとしている一人の男性が見えた。私は聖職者だろうと思った。粉を振ってカールした髪と黒い服が特徴的であったが、何よりも長くて黒いコートの端を縛って、それをポケットに突っ込んでいた。この少し目立つ、しかし全体としておしゃれで、感じのいい人物は、その到着が話題になっていた有名な人に違いないと私は思った。そして直接話してみて、それを確信した。」

こうして二人は出会い、博覧強記の Herder はこの若くて才能あふれる新しい友人に聖書を初め古今の文学の話、新しい文学はどうあるべきかについて熱心に語って聞かせた。Herder の何でも教えたがる癖や、Goethe が計画している新しい作品に対する容赦ない批判などに辟易することも多かったと Goethe は書いているが、Herder が Straßburg で受けた眼の手術にも立ち会い、「この大変重要な人物の役に立つことができた」と書き記している。後年、二人の関係は Weimar で困難なものになるが、Goethe の人生における唯一人の師は Herder であったという思いは終生変わることがなかった。

この Straßburg で Goethe とその友人たちは、Herder を囲んで新しい文学について意見を交わし、Herder から大きな刺激を受ける。その中に、Königsberg の大学を中退してやってきた Jakob Michael Reinhold Lenz（レンツ、1751 ～ 92）もいて、ここでの議論が一つの大きな流れとなって »Sturm und Drang« 文学運動が動き出したことはよく知られている。Lenz は後に Goethe の »Die Leiden des jungen Werthers« と並んで Sturm und Drang の代表作として挙げられる »Der Hofmeister oder Vorteile der Privaterziehung«（『家庭教師』、1774）を書く。

Sturm und Drang は何もよりまず、文学に表現を求めた、若者による既存の価値観と時代に対する抵抗運動で、ドラマを中心とする作品のヒーローは、先行する啓蒙主義文学の主人公のように、正しい倫理観・価値観を持っているが故に既存の社会の中で破滅するのではなく、自然を全身で感じることにより、自分の中に根源的で創造的な力を感じ、自分のルールを自分で作り出し

[4] 『詩と真実』という邦訳が定着しており、英訳でも »Poetry and Truth« となっているが、Dichtung には文学のジャンルの他に「作り話」という意味もあり、「真実」との対比からはこの意味に取るのが自然である。

ていく「天才」で、理性的で客観的に正しいモラルではなく、激しい感情によって自己を表現するのであり、そうした文学表現の重要性を彼らに教えたのが Herder であった。

そして、目指す新しいドラマのお手本として注目されたのがシェイクスピアであった。シェイクスピアは新しいドイツの文学を生み出そうとする若い作家たちにとって、ギリシア古典やラシーヌ、モリエールといったフランス古典主義に取って代わることのできるお手本として大きな関心を呼び、すでに Lessing もその可能性に着目していた。大衆演劇にその源流を持ち、イングランド、スコットランドの歴史や伝承にも素材・題材を採ったその作品は、民族の伝統から素材を採れという Herder の主張に適ったモデルだった。そして、古典劇の規則を無視した奔放・自由で、猥雑なシェイクスピア劇は、ギリシア古典劇、フランス古典主義の形式制を克服し、市民の文学を生み出そうとする思いに応えるものであった。

さらに、形式だけではなく、登場人物たちが表現する感情の真実性も重要視し、Herder は、1770 年 10 月 28 日の Caroline 宛て書簡の中で、自分が勧めた『ロメオとジュリエット』はどうだったかと訊き、この「愛について書かれた世界で唯一の」悲劇は、Wieland（ヴィーラント、1733 ～ 1813）による翻訳の中でも一番の失敗作であると書いている。それは、Wieland 自身がロメオのような愛を感じたことがないからだと Herder は言う。この Wieland も後に Weimar に招かれ、ドイツ古典主義文学の中心地としての Weimar の名声を高める一端を担い、Herder の Weimar 招聘話は最初、彼が提案したともいわれるが、二人の関係はもう少し複雑である。

『ロメオとジュリエット』についての上記書簡の中で Herder は、シェイクスピアを手がかりに Caroline に愛を語ると同時に、当時最先端の文学論争に彼女を参画させていることになる。この手紙を書いているとき Herder はまさに、Straßburg で Goethe たちとシェイクピアについて情熱的に語り合っていたのである。

結婚へ

愛する Herder が再び Darmstadt を出て Bückeburg に旅立ってしまい、残された Caroline は別れを悲しみ、うちひしがれていたが、すぐに気を取り直し、今回の別れは、自分が Herder にふさわしい人間に成長するためであると書き送っている。

Goethe は、1772 年の 3 月に Darmstadt に Merck を訪ね、その際に Caroline と知り合う。Caroline はそのことをすぐに Herder に知らせ、Goethe の言葉遣いあるいは声のトーンが Herder に似ていると書いている。Herder から大きな感動を与えられたという Goethe の言葉も伝えているが、彼らが Straßburg で 6 ヶ月も一緒だったというのは、Caroline には初耳であった。それでも彼女は、Herder のことを評価する Goethe が好きになったと書いている。Goethe は彼女に Herder が作ったバラードを暗唱してくれたが、それは彼女が知らないものであった。

なぜ Herder が Goethe やその文学サークルのことを Caroline に話さなかったのかはわかっていない。それほど重要なこととは思っていなかったのか、彼女の心をつなぎ止めておくことで頭がいっぱいだったのか。

その後 Herder が関わりを持った多くの詩人・文学者たちは、同時に Caroline の友人にもなり、感情の起伏が激しい Herder との友人関係において彼女は緩衝材の役割を果たした。それは夫の敵は妻の敵でもあるということで、Kant を崇拝し、Herder を評価していなかった Schiller に対する関係は終始冷ややかなものであった。

Bückeburg での生活に多くの不満を抱いていた Herder に対し Caroline は、同情と励ましの言葉を書きながら、「この世界で二つの魂が正直に、忠実に、親密に語り合うことができるとしたら、それは私たちのことである」と、はっきりと愛の告白をし、さらに、友人の女性について、ある人を愛しているのに、その貧しさ故に相手が結婚の申し込みをしてくれないと書き、その友人になぞらえて Herder に告白を求めている。それに対する彼の返信は曖昧なままである。

そして事件が起きる。1772 年 8 月 7 日付の手紙で Caroline は、枢密顧問官 Hesse の家での息の詰まる状況を Herder に伝えている。この Hesse という男は、家人に対して何事につけ説教をし、その愚かさに Caroline はうんざりしていた。彼女は何とかこの家から逃げ出したいと願っていたが、姉のことを考えると、容易に決心はつかなかった。

そのころ、貴族の側室だった一番上の姉エルネスティーネは別の男性と結婚し、子どもを生んでいたが、夫と離れて住んでいた。Caroline は姉の子どもの名付け親になっていて、その子の面倒を見ながら姉の手助けをすることを考えていた。姉には、かつてのパトロンから生活費として年金が支払われ、それは 3 人の生活には十分であった。

Caroline はこの計画を Herder に手紙で伝えるが、これは、Hesse 家で何かにつけて恩着せがましい態度を見せる義兄のもと、息の詰まるような生活を続けるよりは、長姉の家で未婚の養育係として、間もなく 1 歳になる、自分が名付け親になった姪の面倒を見ながら一生を送るしかないという諦めとも、求婚の最後の一言が言えない Herder に対する揺さぶりとも考えられる。

姉の家でそうした役目を引き受けることは、「普通の」人生、「女の幸せ」を諦めることであり、Caroline は、「孤児」ではなくなり、「尼」になるのだと書いている。事実、このときの Caroline の置かれた状況は八方塞がりで、そこから抜け出す唯一の希望が Herder との関係であった。文学サークルの友人たちは次々と結婚し、男性たちは Caroline に捧げる詩を書いてくれたりしたが、それは所詮文学ゲームであり、ダンテのベアトリーチェ、ペトラルカのラウラ以来、理想の女性に詩を捧げるという文学的スタイルを真似ているだけで、結婚の申し込みをする男性はいなかった。周りの男性たちからすれば、彼女は Herder の恋人だという意識があったのかもしれない。Caroline を主人公にした詩を捧げてそれらしいそぶりを見せた Goethe もそれ以上のことはなかった。

Caroline のこの計画に対し Herder は、すぐにそして断固としてこれを「禁止」する。「そのようなことは禁止します。私の状況は間もなく変わりそうですので、そうしたらすぐにあなたのところに行きます。だからやめてください。」（1772 年 8 月 7 日）Caroline が心配するのは姉のことで、自分が助けてあげなければ 1 歳の赤ん坊を抱えて助けてくれる夫も友人もなく、路頭に迷うことになるとジレンマを訴える。それに対して Herder は、どうしていいのかまだわからないが、もう少し待ってくれ、と懇願する。これらの言葉から、Herder の Caroline に対する真剣な思い

と誠実さが理解できる。しかし、最後の言葉を発する決断はまだできない。とにかく Hesse 家でもう少し我慢してくれ、と言うばかりである。

そして 8 月 24 日、彼女は Herder に、Hesse 家での次のようなできごとを報告する。二日前の夕食の時、義兄 Hesse は特に機嫌が悪く、自分の息子に腹を立てていた。しばらく前から食事の際には同じような状況が繰り返され、彼女もうんざりしていた。それでこの日はそれ以上不愉快な話を聞きたくなかったので自分の部屋に行こうとしたところ、義兄は彼女に席を立つなと言い、どうしていつもすぐに自分の部屋に行こうとするのだと訊いた。彼女は、こんなうんざりする話を聞かされ続けていると体の調子おかしくなるので、自分の部屋にいた方がいいと答えた。これは義兄には気に入らなくて、激しい言い合いになり、興奮した彼女は最後に、自分の一番上の姉が 1 週間後にこれこれの村に移ってくることになっていて、自分はその姉のところに行く。そしてさらに、自分は Herder と結婚の約束をしていると言ってしまった、というのである。

この発言の効果は絶大で、義兄の反応は、唖然、衝撃、恥ずかしさ、卑屈など、彼を打ちのめす全ての感情であったと Caroline は書いている。ようやく気を取り直した彼は二人の結婚を祝福し、きっと幸せになるだろうと言ったので、「はい、人間に可能な限りの幸せに私はなります」と答えた。彼は、Herder と婚約している彼女がこの家から出て行けば追い出したのだろうとスキャンダルになるので、とにかくこの家に残って欲しいと懇願した。あわや、跪いて許しを請わんばかりであったと Caroline はコメントしている。

彼女は Hesse 家を出る決心に変わりが無いことを伝えて床に就いたが、義兄は眠ることができず、朝早く Caroline のところにやってきて、この家に残って欲しいと改めて頼み、彼女の希望は何でもかなえるし、彼女の健康に悪いので、食事の時は静かにすると約束した。それどころか、一番上の姉についても、自分のところに住んでもらえばいいと提案したというのである。

この出来事以降、義兄は驚くほどに優しくなったと Caroline は書いているが、自分がこれまで見下し、ことあるごとに恩着せがましく対して来た義理の妹が、あの有名な、Darmstadt の貴族の間で知らない者のない Herder の元に嫁ぐというのであるから、うまくすればそれは自分の名を高めることになるが、下手をするとその妻をひどく扱った男として悪い評判が立つかもしれない。Herder が自分の発表する文章に彼のことを書くかもしれない。

Caroline は、Herder の事前の了解もなしに、二人のことを話してしまったことに対して、どうか怒らないで欲しいと懇願する。二人の結婚について Herder は、ひょっとすると別の公表の仕方を考えていたかもしれない。事実、Herder は 8 月 29 日の手紙で、とりあえず、一般的な意味で自分たちは結婚の約束をしたわけではないし、聖職者としてもふさわしい公表の仕方とは言えない、神の法、人間の法に基づいてあなたの発言を否定することもできると Caroline に厳しいことを言っておいて、次に、しかし残念ながら、我々の関係は婚約以上だとも書いている。

それに続いて Herder は、Caroline の行動は痛快でもあると評価し、未来の義兄殿に手紙を書いて、あなたをくれと書こうか、とも言っている。そして 9 月 3 日、Herder は実際に枢密顧問官 Andreas Peter von Hesse に手紙を書いている。遠回しのもってまわった文章で、閣下に結婚

の許可をお願いする手順がちゃんとしていなかったのはまことに申し訳ないが、これまであなたが Caroline に対して示してきたような優しさと高貴な心でもって自分たちの結婚を許していただきたい。ただ、自分は今さまざまな困難に直面しており、これが片付き次第話を進めたいと思っているので、それまではこの件は公表を控えていただきたい。閣下と姻戚関係になるというのは自分としては名誉なことだと思っている、とある。

公表を控えて欲しい、という点について Herder は Caroline 宛の手紙でも、書簡往復のメッセンジャーボーイの役割を果たしていた Merck を通してこの話が漏れると騒ぎになって困るので、もうしばらく秘密にしておくようにと箝口令を敷いているが、ドイツ中の文学者や文学に関心のある貴族・王族の人々にとって気鋭の作家・評論家 Herder の結婚という話題は当然、大きな関心事で、Wandsbecker Bote（「ヴァンツベックのメッセンジャー」）として知られる詩人・ジャーナリストの Mathias Claudius（マティアス・クラウディウス、1740 ～ 1815）が少し前に結婚したときには、それは Goethe を初め文学関係者の誰もが知っている出来事であった。因みに、自分の周りに幸せな結婚をしている女性が一人もいなかった Caroline が、幸せな結婚もあり得るのだと確信することができたのは、心優しい Claudius の結婚であっただろう。

Bückeburg

Herder が Schaumburg-Lippe 伯爵家から Bückeburg に招かれることになるにあたっては、伯爵夫人 Maria の口添えが大きな力になった。彼女は広い心を持った賢い人であると Herder は書いているが、跡取りの男子を産むことができず宮廷でつらい立場にあり、Herder が良い相談相手になっていた。彼は伯爵夫人のことをまだ Darmstadt にいた Caroline にも「魂の友」として紹介しており、Caroline も私たちはきっといい友人になれると書いていたが、結婚すると二人の女性は意気投合し、伯爵家の一人娘が亡くなったとき Caroline は夫人に限りない同情を寄せ、懸命に支える。そしてその 2 ヶ月後の 1774 年 8 月 28 日、Herder 家に長男が生まれると、伯爵夫人が名付け親になりゴットフリートの名前をもらう。伯爵夫人はお祝いのお金の他、赤ん坊の衣類を送ってくれるが、匿名で送られてきたため Herder が不思議がっていると、衣類に刺繍されている M の文字を見た Caroline が、「男ってのは全くだめね！ M は Maria に決まってるでしょ！」と教えたのである。Herder はこのように自分の人間関係に、たとえそれが領主夫人であろうと妻 Caroline を関わらせている。こうしたオープンな人間関係の好対照をなすのが、Goethe の家庭状況である。

1788 年、Goethe は Christiane Vulpius（クリスチアーネ・ヴルピウス、1765 ～ 1816）という Weimar 生まれの 23 歳の女性を愛人にし、その後、伴侶とする。1 年後には August という息子も生まれるが、1790 年には、別の 21 歳の女の子に結婚を申し込んだりしている。Goethe は Christiane と 1806 年に正式に結婚するが、彼女が、Goethe が出入りしていた Weimar の上流社会と関係を持つことはなかった。

1773 年 5 月 2 日、Goethe も列席して Herder と Caroline は結婚し、Bückeburg での新婚生活が始まる。恋人同士が結婚してしまえば夫と妻になり、家庭ではそれぞれの役割を担うことになる。しかし Caroline は妻として家計を護り、子どもを産み育て、その他は夫の影になって満足するような女性ではなかった。さすがの Herder も、ともすれは夫の権威を振り回すこともあったが、Caroline はそういう状況でもはっきりと自分の意見は主張した。Weimar に移ってからの Herder 家における夫婦げんかの様子を Schiller が Körner に充てた書簡で伝えている。

「二人がけんかをすると、一階と二階に分かれ、手紙が階段を行ったり来たりする。最後に夫人は覚悟を決めて夫の部屋に行き、彼の著作からしかるべき箇所を読み上げ、こう結ぶ。『これを書いたのは神様に違いありません。神様に腹を立てることはできません』。すると敗北した Herder は彼女の首にすがりつき、闘いが終わるのである。」

Bückeburg での彼らの生活は常にお金の心配に悩まされる苦しいものであった。伯爵夫人マリアとの親密な交流はあっても、Herder 家が受け取る手当はなかなか増えず、時には減額されることもあった。Bückeburg の人々そして周辺の村の農民たちも Herder の説教を喜んで聞きに来て、彼は愛されたが、田舎町には、Herder を作家、評論家としてきちんと評価してくれる人たちもおらず、充たされない思いが積もっていく。

そうした状況の中でも Herder の旺盛な執筆活動は休むことなく、重要な論文を次々と発表していく。そのひとつが »Ideen« で、右肩上がりの人類の発展を確信する啓蒙主義的歴史観を根底から否定する、Sturm und Drang の記念碑的論文である。

Herder 家には 1776 年 8 月 18 日、二人目の息子 August が生まれる。Goethe が名付け親になり、自分の息子と同じ名前を付けたことになる。

Weimar へ

この頃、友人たちは Herder を神学教授として Göttingen（ゲッティンゲン）大学に招聘すべく努力していたが、リベラルな Herder を歓迎しない保守的な人々の抵抗で、これは頓挫してしまう。その頃、Weimar では Goethe を初め友人や Herder を評価する人たちが彼を Weimar に呼ぼうと努力していた。1775 年の 12 月には Goethe から手紙が来て、「親愛なる兄弟、公爵は、教区総監督を必要としている。Göttingen に行くという計画が変わったのなら、ここでやることがある」。そして 1776 年 2 月、Sachsen-Weimar（ザクセン・ワイマール公国）から教区総監督及び市教会の上級牧師として招聘したいという話が伝えられる。そしてその年の 6 月、Herder とその家族にとってパトロンであり良き友人であった伯爵夫人 Maria が病によって亡くなった。この死によって伯爵との絆はさらに強いものになったが、Herder は惜しまれつつ職を辞す。

1776 年 10 月 1 日、Herder 一家は幼子を抱えた苦難の旅の末、Weimar に到着する。Goethe は一家が住むことになっていた、そして Herder が 1803 年に亡くなるまで住んだ教会裏の教区総監督公舎を、引っ越しを手伝うために先乗りしていた Caroline の弟 Siegmund（ジークムント）にも手伝ってもらってみずから改装し、一家を迎える準備をした。しかし、一家が夕方遅く

Weimar に着いた時、Goethe は公爵 Karl August（カール・アウグスト）と狩りに出かけていた。このときすでに二人の生きる世界は別々の方向を採っていたのである。保守的な宗教関係者の強固な反対を押し切って Herder にいわば救いの手を差し伸べた Goethe であったが、公爵の厚い信頼を得て、大臣として宮廷で重きをなしていた彼は自由奔放な生活を送っていた。

それに対し Herder は、結婚後は夕方には必ず家族と共に家にいて、子どもが生まれてからは家族全員そろって寝る前にいろいろな話をし、一緒に本を読み、最後は友人 Claudius の作った歌をうたって一日を終えることを習慣にしていた。市教会の牧師として、教区の責任者としてだけでも膨大な公務を果たしながら、文学界、思想界の最新情報に常に目を配り、多くの著書・論文を書き、超人的な活動を続けた彼が、夫として父親として家庭をも大事にしていたというのは驚きである。そこには妻として家庭を守るだけではなく、知的戦友として彼を支えた Caroline の存在が大きく貢献していた。

こうしてスタートした Weimar での生活であったが、Goethe と Herder の間には文学観、政治観を巡って次第に考え方のずれが生じ、そこにドイツ古典主義文学のもう一人の主役 Schiller が加わり、Herder に否定的な Schiller と Goethe との関係が深まるにつれて、Herder は孤立していく。更には既述したように Kant との論争も加わり、彼の立場はますます難しいものになっていく。Goethe・Schiller の立場からすれば、いつまでも変わらぬ主義・主張に拘泥する Herder はすでに過去の人であり、あらゆる批判に敏感に反応し、傷つき、攻撃的になる彼を周りの人々は疎ましく思い、避けるようになる。

しかし、どんなときも Caroline は彼の一番の理解者であり、変わることなく彼を支え続ける。Herder の主著 »Ideen« はすでに述べたように師 Kant に徹底的に批判されるが、Herder 夫妻は 1784 年 5 月初め、出版元の Hartknoch に改訂版を送る際に二人で添え状を書き、その中で妻は、»Ideen« がまったく別の作品になったと言っている。このことは彼女が夫の著作をまさに夫の目線で読み、その意味をひとに伝えようとしていることを示している。さらに Caroline は同 8 月、スイス出身の若い神学者、教育学者で、一時、Herder 家に寄居したこともある Johann Georg Müller（ミュラー、1759 ～ 1819）に対し、彼に »Ideen« を送るよう印刷屋に指示したこと、これを「純粋な美しい心で読み、共感してくれる人があるとすればそれは彼である」と夫 Herder に伝えたことを知らせ、Müller の »Ideen« に対する批判に反論までしている。

この頃、かつて頓挫した Göttingen 大学への招聘話が、現地の友人達の努力によって再び持ち上がる。以前の苦い思い出を払拭できていなかった Herder はこれを断るが、その決断には積極的な妻の関与があったことを彼は手紙に記している。そして 1803 年 12 月 18 日に Herder が亡くなると、Caroline は息子たちと協力して Herder の遺稿集を出版する。